

## 研究テーマ

「人と関わることへの自信や意欲を育てるために」

1

## 本実践に関連する児童生徒の実態

対象児童生徒 小学校第4学年

### ○課題

- ・交流学級において自分から友達へ話しかけたり、困った時には尋ねられたりできるようになること。
- ・人と関わることへの自信や意欲をもつこと。

### ○強み

- ・絵を描くことや、ものづくりが得意である。
- ・興味をもったものは、納得がいくまで探求しようとする。

2

## 指導目標・指導仮説

教科等及び単元（題材）名  
自立活動の時間「友達に遊びのさそいをしよう」

目標（本実践終了時の期待する子供の姿）  
自分から友達へ話しかけたり、困った時には尋ねられたりできる。

指導仮説  
児童の思い入れのある手作りの「ことわざカルタ」で、交流学級の友達とふれあうことで、人と関わることへの自信がついていこう。

児童生徒の実態

3

## 指導・評価の計画

◆表1 指導・評価の計画

	主な学習活動	目標	評価方法
1次	遊びに誘うときの言葉について理解する。	いつ・どこで・何をして遊ぶかを相手に伝えられる。	・ホワイトボードへの筆談 ・会話
2次	交流学級の友達を遊びに誘う。（教員のサポートあり）	教員のサポートを受けながら、筆談で、交流学級の友達を誘うことができる。	・ホワイトボードへの筆談 ・行動観察
3次	交流学級の友達を遊びに誘う。（教員のサポートなし）	教員のサポートを受けずに、筆談で、交流学級の友達を誘うことができる。（自力で自分の意思を伝えられる。）	・ホワイトボードへの筆談 ・行動観察

◆表2 実践前後の変容の評価

評価内容	評価方法
実践前後での、友達への自発的な働きかけの様子。	①行動観察 ②写真 ③日記

4

## 指導の実際① ～SST活動の様子～

『友達に助けを求めよう』  
「助けてください。」「ありがとう」

『上手な断り方をしよう』  
「OOくん遊ぼう。」「ごめん、今日はOOがあつて遊べないんだ。また遊ぼうね。誘ってくれてありがとう。」



『友達にお願いをしよう』  
「OOくん、～を持っていますか。」「はい、どうぞ。」「ありがとう。」「いいえ持っていない。」「わかりました。」

『友達からヒントをもらおう』  
「OOくん、ヒントをください。」「わかりました。」



5

## 指導の実際② ～ことわざカルタ遊びの様子～

『友達に遊びのさそいをしよう』  
「ことわざカルタで遊びませんか。」「いっしょにおかせ・昼休憩  
人数：4人  
「ありがとうございます。では、なのはな1で待っています。」

教員のサポートのもと、交流学級のみんなに遊びの誘いをしています。

カードを見ながら、静かな声で読み札を伝えています。



6

## 指導の実際③

～遊んだ時の日記～

ことわざカルタで遊んだ時の気持ちを日記に書きました。友達と一緒に楽しめたことや、友達からかけてもらった言葉に、嬉しい気持ちがあらわれています。この日記は交流学級の学級通信で紹介され、児童の気持ちを他児に知ってもらえるきっかけになりました。



～遊びのお祈り～

交流学級の友達に遊びのお祈りをしました。この日は、交流学級のクラス遊びの日だったので、カルタ遊びができました。



交流学級のみんなから、クラス遊びを誘ってもらいましたが、「鬼ごっこ」はやりたくなかったので断りました。



7

## 指導の実際④

～遊びの誘い(サポートなし)～

三回目で、初めて教員のサポートなしに、一人でみんなに遊びの誘いをすることができました。



関わりが増えるにつれて、整音が和らぎ、笑顔が多く見られるようになってきました。



～積極的な発表～

授業参観で発表できたことは初めてです。授業中何度も拍手を、堂々と発表をしていました。



8

～困った時のお願い～



給食のとき、おかわりがほしかった。ティッシュがなくて困っていたとき、自分から友達に筆談でお願いができました。

## 学習過程の評価

次	学習活動	児童生徒の状況	達成状況
1	遊びに誘うときの言葉について理解する。	友達を遊びに誘うために必要な内容(いつ・どこで・何を遊ぶか)を考え、伝達手段であるホワイトボードに書くことができた。	○
2	交流学級の友達を遊びに誘う。(教員のサポートあり)	教回、教員のサポートを受けながら、筆談で、交流学級の友達を誘い、教人と「ことわざカルタ遊び」を楽しむことができた。誘った日のうち1度、交流学級のクラス遊びの日と重なったときがあり、逆に誘ってもらった機会があった。しかし、「鬼ごっこ」はやりたくなかったため、断った。断る勇氣をもって筆談で応えることができた。	○
3	交流学級の友達を遊びに誘う。(教員のサポートなし)	遊ぶ回数が増えるにつれ、教員のサポートを受けずに、筆談で交流学級の友達を誘うことができるようになった。	○

9

## 実践前後での児童生徒の変容

実践前	実践後
<ul style="list-style-type: none"> <li>自分から働きかけることに自信がもてなかった。</li> <li>放課後に交流学級の友達と遊びたいが、自分からは誘う勇氣がないので、教員にサポートを求めている。</li> <li>交流学級の友達に意思を伝えたいときは、教員を介さないとなかなか伝えることができなかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>友達が落としたものをさしを拾い、渡してあげられるようになった。</li> <li>困った状況のとき、自分から近くの友達に筆談で助けを求めることができるようになってきた。</li> <li>もっと友達と交流したいという気持ちが芽生え、誘う回数が増えた。</li> <li>交流学級での授業で、自発的に筆談で発表するようになった。</li> <li>少人数で会話するとき、少し離れた場所から相手に届く声の大きさを会話できるようになってきた。</li> <li>交流学級の友達が以前より話しかけてくれるようになり、会話が増えた。</li> </ul>

10

## 指導仮説の検証

- 児童生徒は目標を達成したか。
  - ・達成した。
- 判断の理由・根拠
  - ・教員のサポートを受けずに、筆談で交流学級の友達を誘うことができた。
- 指導の工夫は有効であったか
  - ・有効であった。
- 判断の理由・根拠
  - ・ソーシャルスキルトレーニングで身に付けた「誘う」「返答をする」「お礼を伝える」等のコミュニケーションスキルを使い、自分で交流学級の友達を誘うことができた。
  - ・自分の作った「ことわざカルタ」で交流学級の友達に楽しんでもらう経験を通し、自己肯定感が高まった。
  - ・交流学級の友達とふれあう機会が多くなるほど、人と関わることへの自信がついてきた。

11

## 指導の改善案

成果(よかった点)	課題(改善が必要な点)
<ul style="list-style-type: none"> <li>児童は「ものづくり」が得意であり、自分の作った「ことわざカルタ」で交流学級の友達に楽しんでもらう経験を通し、自己肯定感が高まった。</li> <li>自己肯定感が高まり、自分の意思を相手に伝えることに積極的になってきた。</li> <li>交流学級の友達が誘ってくれるようになった。</li> <li>放課後も、積極的に友達と遊ぶ機会が増えた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>状況に応じた応答ができる必要がある。ソーシャルスキルトレーニングを積み、状況に応じた応答ができるようにする。</li> <li>交流学級での授業では、同じ班の友達と関わる機会が多いので、同じ班の友達との人間関係をつくっていくことが必要である。</li> </ul>
<b>成果・課題を踏まえた改善案</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>状況に応じた応答ができるよう、ソーシャルスキルトレーニングを積んでいく必要がある。</li> <li>困った時には、自分から同じ班の友達に伝えることができるよう、筆談やポイスレコーダーで伝えられるように練習をさせる。</li> </ul>	

12